

---

# 美女に勝てない善人

裏表ユイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

美女に勝てない善人

### 【Nコード】

N1439BA

### 【作者名】

裏表ユイ

### 【あらすじ】

高校生になつた平凡・不憫・ツッコミ属性の前田 善。教室に入ると、目の前には美少女が。その美少女は、中学二年の終わりに善を助けてくれた…

善が一目惚れした少女だった。善は、入学して一週間もたたない内に、美少女に告白した。しかし、その少女の本性は…ドSだった…。他人の前では猫被りのドS美少女。人が善い為か美少女にこき使われる主人公。「www」しか言わないへのへのもへじのお面をつけている主人公の幼馴染。

今日も善は、二人を抑えられるのか!?

「何でこんな目に遭うんだろう…(泣)」by主人公

## 最初ノ葉 マ エ ガ キ by 作者（前書き）

これは、一種のプロローグみたいなものです。

本文は始まっていません。タイトルの通りの章です。

後に関わって来る（というより、最後の最後にしかないかもしれない）ので、

読んでも読まなくてもどちらでも結構です。

それでわ、どうぞ

## 最初ノ葉 マ エ ガ キ b y 作者

僕は、作家だ。名前は…あるけどここでは教えられない。

作家になってお話を書くのは、小さいころからの夢だった。

いや…正確に言うと、このお話を書くことと思ったのは、大学生。

僕の…大切な大切な三年間の思い出。それを残したかった…。

この思い出を、僕が忘れないために。

仲間が、忘れても思い出せるように。

そして…僕の、いや、僕らの軌跡を残すために…

「何…してるの？」

僕の妻が来たようだ。

「僕らが出会った…あの三年間を残そうと思って」

「ああ…懐かしいな…」

そういつて微笑む妻。美人なだけに、絵になっている。

これは…僕たちだけの…物語。

最初ノ葉 マ エ ガ キ b y 作者（後書き）

短いですか？

初めて書いたのと、最後の複線ということで、勘弁してください。

名乗り遅れました。自分、新人の裏表ユイと申します。

以後、宜しく願います。

再度いいますが、この複線は、本当に最後の最後にしかないかもしれません。

なので、スルーして下さって結構です。

がんばりますので、宜しく願います。

## 零ノ葉 登場人物（前書き）

登場人物の所で詳しく説明したい所があったので、ついでに作ってみました。

一部ストーリーにも関わります。

ちなみに、身長はなんとか考えましたが、体重はよくわからなかったので書いていません（どのくらいが細身とか。身長は、テレビのおかげでなんとか）

あと、どうしてこのキャラができたのか…など、少しずつ書いていくので、  
チェックしてみてください。

それでわ

## 零ノ葉 登場人物

### 登場人物

名前 前田 善まえだ ぜん 性別 男 年齢 15歳 身長 176cm

### 詳細

- ・ 髪の毛は黒い・髪の毛が一本だけ横にはねている（いわゆるアホ毛）・童顔（本人は気づかない）
- ・ 不憫、平凡、ツツコミ役の可哀想主人公の要素を兼ね備えている・少々毒舌気味・鈍感
- ・ 家族は、母、父、兄、妹の五人家族・一人称は僕・足が速い・五味の言葉を翻訳できる
- ・ 実は母が女優、父が大物司会者、兄が俳優、妹がアイドルのすごい家族
- ・ 本人が純情すぎるため、悪意に敏感・悪意の籠った裏の声だけ分かる

この物語の主人公。自分、不憫系主人公が大好きなのでこんな感じに。  
善が出来たのは、蒼が最近うごめもの「棒人間」にはまっているというので、自分も書いてみたくなりまして、男の子がリボンつけた女の子に「付き合ってください！」「みたいな感じに手を出しているのを書いたんです。それを見た蒼が、棒人間に目をつけ、これが意外と面白かったことからできました。  
名前は、前に進まないの「前」と、不憫だけどいい人にしようよ思  
い善人の「善」で、前田 善です。

名前 女美じよみ 優子ゆうし 性別 女 年齢 16歳 身長 165cm

## 詳細

- ・ 髪の毛は明るい茶髪・ポニーテール・縛ってあるリボンは蝶々結び・髪の毛が縛っていると腰まで
- ・ 認めた人と知っている人以外は猫被り状態・釣り目・猫被りでは少々強きの優しい目
- ・ 一人称は俺、猫被りでは私・家族は、母、父、弟の四人家族・猫被り中に、素が出る時がある

この物語のヒロイン。実はもうちょっとあるんだけど、それはネタに使うので書いてありません。  
また、弟関連ネタとかいろいろあるんですが、それもまだ秘密ということで。

ネタをバラシタ時に追加していきます。

あと、女美さんは、善の説明にあるリボンをつけた女の子です。蒼がおもしろがって、善の告白を断るときに「はあ!？」というヤクザ系の顔を書いたので、そこからいろいろと膨らましてできました。名前は、美女を反対にして「女美」優しそうに見えて酷い子ということ、「優子」で、女美 優子です。

名前	五味 <small>ごみじょうた</small>	良太	性別	男	年齢	15歳	身長	181cm
----	--------------------------	----	----	---	----	-----	----	-------

## 詳細

- ・ 髪の毛は濃い茶髪・少々クセツ毛・へのへのもへじのお面を被っている・善曰く顔はかっこいい
- ・ いつも「www」しか言わない・意思疎通の為、スケッチブックを持っている・一人称は俺
- ・ 善曰く、中学は荒れていた（善しかわからない）・本を持っている（何の本かは後々）
- ・ 家族は、母、父、弟の四人家族・よく喧嘩をふっかけられるのだ

が、ソノゴカレラヲミタモノハイナイ

・成績優秀でスポーツ万能という完璧超人・家庭全般は出来るけど面倒くさくてやらない

この物語で善の幼馴染。そして、平凡な主人公の代わりに万能をもちた人。実際は作る予定はぜんぜんなかったんだけど、情報通は必要だろう！みたいな感じで書いたらいつの間にかチートで定着していた。お面の方は、蒼が面倒くさくて顔の代わりにへのへのもへじを書いたのがきっかけ。

てか、五味君の性格はほとんど蒼が面白半分につつた。まあ、自分には特に問題はないけど。

そのためか、蒼が一番好きなキャラは五味君らしいです。自分は善君。

ちなみに、うごめもで前に蒼がキャラ投票した結果は、女美さんが一番だったらしいです。

名前 鈴蘭 すずらん ゆか 有華 性別 女 年齢 16歳 身長 165cm

#### 詳細

・髪の毛は赤茶色・肩よりちょっと下くらいのストレート・校長の娘・少々？わがまま

・中学までちやほやされて来たため、高校でちやほやされる女美さんが気に食わない(同属嫌悪)

・他の男と違い、最初に何かの意思を持った視線を向けることなく背が自分より高いのに何故か可愛い

(童顔効果) 善に惚れてしまった・自分の親衛隊をもっている

まったく作る予定がなかったキャラクターです。

女美さんの裏の声、そして、それを相手に心の中で言ってるのが書きたくて四ノ葉を作ったのですが、まさか裏の声同士で争うとは思

わなかった…。

そして、善に惚れる予定は無かったです、まったく主人公らしく無いので、これじゃあ善の立ち位置が脇役になってしまう…！と思ひ、主人公によくあるフラグを立てました。

今後、この娘が出てくるかはわかりません。自分が思い描いたものとだいぶ違うものしか今までできてませんから。リクエスト（この子を出して！などの声）があつた場合は出しますけどね

今後、どんどん追加していきます。

## 零ノ葉 登場人物（後書き）

三話目に善だけの設定があるので、その前に追加しようと思いましたが、  
ました。

登場人物より話書けって？大丈夫です。ちゃんと書きます。

話を読んでふとこの日付を見たら更新されている…なんてこと  
もあると思うので、時々チェックしてみてください。

それでわ。

一ノ葉 一目惚れは最悪です… by 奴隷一号(前書き)

サブタイトルの名前の部分は毎回変わります。

その話にあった名前にしていることと思っているのですが、がんばってだれか当ててみてください。

それでわ

一ノ葉 一目惚れは最悪です… by 奴隷一号

今日は高校の入学式。何度体験しても、このドキドキは止まらない。バーコードの校長先生の催眠術師じゃないのっていう長いお話を聞き、僕はクラス表の所へ向かった。

1年2組か

僕はそう思い、自分のクラスへ向かう。なんともない高揚感と期待感に教室に向かう足取りは軽い。そんなことを考えていたら、教室の扉の前についた。ガラガラッ と音を立てて扉を開けるとそこには…美少女がいた。茶髪で腰まであるポニーテール。そのポニーテールを縛ってあるリボン。少々釣り目気味な目も、意思の強さをあげさせている。そして何より…僕が一年前に一目惚れした少女だということだ。

「こんにちはわ。私、女美じよみ 優子ゆいこといます。これから宜しくお願ひしますね？」

「はっ、はい…。あっ！ぼっ、ぼく、前田まえだ 善ぜんといます…。よろしく…」

照れていた僕は、そのとき気がつかなかった…。

女美さんが、悪魔のような微笑みを…浮かべていることに…。

僕は、女美さんに告白した。

早い？そんなことはない。だって、一年間も思い続けていたんだ。一年ぶり（といっても、向こうが覚えているかはわからないけど）に好きな人を見たんだ。

思いが募っているのに告白しない手はない！ということだ…

「付き合ってください！！！」

一秒…二秒…三秒…時間が過ぎるのが、とても遅く感じる。

僕、小さいころから本番に緊張するタイプなんだ…。覚悟を決めたのに、今とても不安です…

すると、女美さんが何かをいった

「あつ……………！！」

「『あ』？」

「あつはははははは！はははははははは！！！」

突如、女美さんが笑い出した。

…えっ！なんか変な薬でも飲んだ！？それとも笑い草！？それともそれとも…

一番最初に結論を出したのに慌て、なんでこうなったのか原因を探っている、笑い声が止んだ。

「だつ、大丈夫！？女美さん！」

「はあ？意味わかんねえこというなよ。俺に告白してきた馬鹿がいたから笑っただけだけ ぞ？」

いや、そっちの方が意味がわからないですから！つてか…え？前からこの声が聞こえてくるけど…まさか女美さんがいつてるはず…ないよな…？

「信じられないって顔してるな。まあ、そうだろ。俺の演技は完璧だかな！」

自信満々に言う女美さん。

まさか…本当に女美さんなのか…？

「まあ、信じるも信じないもお前しだいだ。久しぶりに面白いもん見してもらった。じゃなっ！」

そういつて去って行く女美さん。ふと、何かを思ったのが、こっちを向いてこういった。

「明日から俺の奴隷な？」

その後、僕は十五分くらい唖然としていた…

## 告白の翌日

そんなはずはない。そんなはずはない。そんなはずはない。

僕は、現実逃避をしながら学校に来た。

昨日の夜は、寝たらきつと夢なんだと信じて寝たけど…不安だ。きつと夢だ…！という期待をこめ、教室を開けると…

「よっ！奴隷一号クン？」

夢じゃ…なかったようです…

一ノ葉 一目惚れは最悪です… by 奴隷一号（後書き）

このお話、実は親友の蒼（仮）と一緒に作ったものなんです。そうはいつても、最初の部分とキャラクター以外は別々でやってます。

蒼はうごめもで書いているんですが、パソコンができません。私はパソコンで書いているんですが、うごめもができません。なので、キャラクター以外は別々です。

一緒の所もありますけどね。

これからも（読んでくれる方がいたら）ぜひ読んでください。

二ノ葉 ティータイムの…始まりです…

b y 紅桜(前書き)

残酷ではないと書いてあるんですけど、血とか書いてあったら、残酷指定にしたほうがいいですか？

とりあえず今回は忠告で。

今回のお話は、残酷な表現が含まれている可能性があるのですが、苦手な人はブラウザバックしてください。

必要だったら残酷指定するので言ってください

それでわ

横には、仁王立ちした女美さん。

その目の前には違う学校の制服を着ている不良らしき人。

そして、女美さんの横にいる…かばんを二つ持っている僕。

どうしてこうなった…

僕が、女美さんの奴隷一号（認めたくないけど）になって数日がたった。

その日、僕は女美さんのかばんを持たされ、女美さんの後について下校していた。

そのまま何もなく無言で道を歩いていると…路地裏からぞろぞろと不良っぽい人が…

って、あの人達完璧不良じゃないの!?

ってか、その前に、あの路地裏って行き止まりなんだけど、どうやってそんな人数が入ったの!?

僕がそんなくだらないこと（僕にとってはすごい不思議だけど）を考えていると、女美さんと不良（もう面倒くさいからこれでいいや）のリーダーっぽい人が話していた。

「よう。嬢ちゃん。何してるんだ?」

「こんにちわ。あなた方こそ何を?」

猫被り女美さん。よく学校でみるけど、猫被りしていると妙に寒気がするんだ…。

この寒気に気がついていれば……

「ああ？…俺らは、紅桜ベニザクラって奴を探しているんだ。嬢ちゃん知らないか？」

「ッ！…なんですか？その…紅桜って」

一瞬、女美さんの顔が歪んだ気がしたのは気のせいか…？

「まっ、普通知らないよな。それより嬢ちゃん。これから俺たちと遊ばないか？そんな後ろのひよろっ　こいのなんかほっとしてさ」

ひよろっこいの！？ひよろっこいのって僕のこと！？たしかに中学生のころはひよろっか男子にいわれてたけどさ…

「ごめんなさい。私そういうのにはあまり…」

「まあまあ。いいじゃねえか少しくらい」

そういつて女美さんの腕をとって強引につれていこうする。いくら猫被りだって、女美さんは女性だ。強引につれていいはずはない！それに、ちよっつと青筋がたつててぼれそうだし…

「やめてあげてください！嫌がつてるじゃないですか」

「ああ？邪魔だよ！」バンッ

やめてくださいといってみたが、そのままなげだされてしまった。

ああ……。女美さんがそろそろ…

「………せんだよ………」

「なんだ？やっつとOKしてくれたのか？やっつぱこんなひよろっ」  
「うっせえんだよ！」！？「ゴッ

あゝあ…女美さんを怒らせちゃったよ。華麗に不良リーダーの顔面に吸いこまれていったこぶしは、不良リーダーさんを吹き飛ばした（といっても、少し浮いたただけだけだ）

「俺を誘うなんて、輪廻転生しても経験知がたりねえよ！」

そのまま フンッ っといつて後ろを振り返り去って行く女美さん。そのとき…僕はみたんだ…。不良リーダーが立ち上がるのを。そして、そのまま女美さんに殴りかかるのを。

「このっ…！甘く見るなあ！！」ゴッ

だから…女美さんが後ろから殴られるのをみていられなくて…僕が飛び出したんだ…

最後に僕が見たのは…おどろいた顔をした女美さんだった…

### 美女視点

「おいつ！お前！お前！おきろって！」

「そいつは気絶してるぜ。嬢ちゃん」

気絶しているのはわかる。だが、なぜ俺を庇ったのかがわからない。こんなひどいやつなのに…

「邪魔者はいなくなっただし、嬢ちゃんを倒して無理やりつれていくぜ」

そういう不良に、俺は鳥肌がたった。

またやっちまったか

俺はそう思い、喧嘩をするために【アレ】を取り出した。：本当は使いたくなかったんだが…

「おっ、お前…もしかしてお前は…」『紅桜』!？」

そう。俺が【アレ】といったのは、紅桜。正式に言つと、俺は紅桜じゃない。呼ばれているのは俺の持っている木刀。俺からはふつたことがないのだが、なぜか喧嘩をふられ、それをすべてかっていたらいつの間にかこんな異名がついたのだ。

この異名をといつめたら、木刀が紅いから、いままでに倒した人の血というこらししい。

【妖樹 紅桜】死人の血を吸って紅い桜の花を咲かす樹。これが元らしい。

それはおいとして  
閉話休憩

「さあ、ティータム血罨時間の始まりだ…!!」

俺は、あいつらを倒したあと、こいつを背負って帰り道を歩いていった。

そして…考えるのはこいつが何故庇ったのか。

こいつを背負いながら考えていると、こいつが目を覚ました。

「う…ん?ここ…は…」

「今、お前を背負って帰っているところだ。」

そうすると、あわてて俺の背中から降りよつとすこいつ。

「ちよっ、降ろし…ねえ、これってなに?」

「!?!おまつ、それ返せ!」

あわてたときに見つけたのか、紅桜を手にするこいつ。俺がいつも返せというと、いつも普通に返すのに、なぜか返さないこいつ。…頭でも打ったか?

「ねえ、女美さん…この木刀…なんていうの?」

「だから、かえ…:…は?」

「この木刀、名前とかないの?」

「え?いや、紅桜つてのがああるけど…:…どうして名前?」

「そつか…この木刀、紅桜つていうのか…:…いい名前だね」

そういつて、紅桜を見つめるこいつ。それを聞いたと同時に、俺に安堵感が襲ってきた。

…もしかして俺は…:…こいつを試してたのかもな。中学の奴等みたいに裏切らないかどうかを。

ドサツ

俺は、そう思ったと同時に、背中にいるこいつをおろした

「いたつ!女美さん…いきなりおろさないでよう…:…」

「もうおきたんだからいいだろ。それと、これは俺のもんだ」

そういつて、こいつから紅桜を奪い取る。…いままで忌々しかったが、これからは好きになれそうだ…

こいつのおかげっていうのがちょっと気に食わないがな。

「早く来ないと置いてくからな!善!」

「?…:…わわっ!まってよ!」

なにかに気づきそうだった善が、慌てて女美の後をついていく。

その女美が持っている紅桜は、夕日をあびて、きれいな紅に光っていた。

二ノ葉 ティータイムの…始まりです…

by紅桜(後書き)

前と違って長いって？気のせいです。

自分と蒼の間では、女美さんは最初の後、普通に善と呼んでいるのですが、

奴隷一号から善に行くにはなにかエピソードがないとなぐ  
と考えたのがこれでした。

木刀は最初から持っていたので、それにまつわるエピソードを考え  
ました。

スケッチダンスのヒメコのエピソードも考えるヒントになりました。  
ありがとうございます。

今回は、三人組の三人目が出てきます。期待してください。

三ノ葉 + a    w w w (善は意外と毒舌気味だと思つ。しかも無自覚の)

b y

今回は、会話がなにげに多いです。

そして、いつももある説明風のも文字が少なく、状況が分かり辛いか  
もしれません。

そのときは言ってください。修正します。

それでわ

四月の朝。僕は、学校に早くいくために違う道を通っていた。  
だが…

「ふわあゝ……。眠いなゝ……。」

「……にゃ〜ん……」

「へ……？なにか聞こえたけど……」

なにかの声？が聞こえた。猫っぽかったけど……

「……にゃ〜ん……！」

やっぱり空耳じゃなかった。えっと……方向は……

「……にゃ〜ん……！」

「！こつちか……！」

僕はそういつてかける。入り組んだ路地を抜け、出てきた場所は……

「学校………？」

そう、学校に出てきたのだ。こんな所なんてあるんだ〜と思いつなが  
ら周りを見渡す。

中々に広く、芝生もあつて居心地が良さそうだった。

「にゃ〜ん！」

「あつ、忘れてた……」

そうだった…。僕、猫の鳴き声を頼りに来たんだっけか。  
いい場所見つけられたのは、猫のおかげだな〜と思いつながら猫を探  
す。

少し探すと見つけた。だけど、その場所が…

「何してるんだよ……」

「にゃ〜ん!!」

この学校を囲んでいるコンクリートの穴に挟まっていた。

太っている猫では無いんだけど…チャレンジしてみたらはまりまし  
た。みたいな感じだ。

穴が小さいから、それくらいわかんと思うんだけど…

「にゃ〜ん」

「はいはい。わかったよ。今出すから前足で地面を掻いて急かすな  
っ、と…これでいい？」

「にゃ〜ん」

「じゃあね。もう無謀なチャレンジはするなよー!!」

「にゃ〜ん!!」

そういつて僕は校舎に向かう。

早く来れたのはあの猫のおかげだな。とさっきと同じ様なことを思  
う。

後に、ここが憩いの場となることを知らないで、僕は校舎へ歩みを  
進めた。

「よっ!善。早いな」

「日直なので、早く来ないといけませんから」

あの場所から校舎に向かい教室の扉についた頃、女美さんと出くわした。

まさかの女美さん。予想してなかった。ってか、女美さんってこんなに朝早かったんだ。

「…？そういえば、もう一人いないのか？」

「はい。入学した当初から来てなくて」

「それは「www」（それは大変だな）」「うわあああ！？」

「あつ！良太！！」

突然、女美さんの言葉をさえぎり「www」といいながら僕の幼馴染、五味良太ごみりよつたが現れた。

「どこの学校に行ったのかと思ったよ」

「www（何気にひどいよなお前）」

「えっ？そう？」

「wwwそつ」

「……ってか、お前らだけで話すんじゃねえ！」

そういつて倒れていた女美さんが勢いよく立ち上がり、僕の頭をつかむ。

…つかむ？なんか嫌な予感が…

「いたたたたたっ！？」

やっぱり嫌な予感がしたんだー！！アイアンクローとか素で受けたの初めてだよ！！ってか、痛い！！

「俺にも説明するか…?」

「しますします。だから頭の上にあるものを外してくださいいいい  
い!」

手をどけられ、痛みから解放される僕。…痛すぎる…。そして、ド  
スの響いた声はやめて欲しい。  
ビビルから。ほんと。

「じゃあ、まず、この変なお面の説明を。」

「了解です!えっと、このへへのへのもへじのお面を被っているのは  
僕の幼馴染の五味 良太です。」

身長は181cmで「そういうことをいつてんじゃねえ!」え  
?じゃあ、どういうことを?」

「なんでお面を被っているか。あと、なんでお前がわけわかんねえ  
言葉を理解できるのか」

ああ。そんなかんたんなことか…。なんで知りたがるのか僕には不  
思議だけど、話したほうがいいよね。あんまり口答えするとまたア  
イアンクローかけられるし。

「えっと…、良太の顔を見ると、なぜかみんな気絶しちゃうんです  
よ。で、気絶した人は良太の顔を覚 えてないみたいで。そんなこ  
とが何回も続いたら面倒くさいから。ということ、良太がお面  
をつ け始めたんです。ちなみに、すっごいカッコいいですよ。」  
「へー」

そのとき、僕は見た。女美さんの顔が ニヤリ と笑うのを

「じゃあ、見た奴はいないわけだな」

「はい。そうですけ…って、もしかしてみるつもりですか!？」

「ああ。見ないと女が廃るからな」

「いや、見なくても、ってああ…、もう、僕知りませんから」

忠告しましたからね!と口をつむぐ僕。

女美さんは、良太のお面を取ろうと近づく。そして、ゆっくりお面に手をかけ…外す。

すると、女美さんが彫像の様に固まった。

後ろからみると顔はわからないんだけど、耳が真っ赤なのがわかる。

ああ…女美さんもか…

突然、女美さんが勢いよく良太にお面を被せた。被せた本人はすごい息が荒い

「なっ…なんだあれは!!なんか…こっ…ああ!!よくわかんねえけど!!…今のはやばかった…」

「気絶するかと思った」

「だから言ったのに…」

「うるせえ!俺のチャレンジ精神が揺さぶられたんだよ!」

そっ…いい、フンツ! といって教室に入って行く女美さん。

けど、なんで良太の顔を見て気絶しなかったんだろう?不思議だな。男子ですらダメなのに。

「すごいな。女美さんは」

「www(自分を柵に上げて言うな)」

「?なにか言った？」

「www(いや、何も。というか、日直当番じゃないのか?)」

「あー!!忘れてたー!!…ってか、もう一人誰かわかんない!」

「www(俺www)」

「いや、笑つとこじゃないから。」

そういつて急いで教室に入る僕。その後を本当に笑って入る良太。このころは…この三人であんなにたくさん、いるとは、まったく考えていなかった。

ちなみに、朝みた猫に女美さんが似ていて、ちょっと笑ってしまい、女美さんにまたアイアンクローを  
やられたことは秘密です。

？ by 善  
おまけ 女美さんが来るの早い理由って…

こんな女美さんが朝早いには理由があるだろうと思ひ、僕は女美さんに聞いてみた

「ねえ、女美さん。なんで女美さんってそんなに来るのが早いのか？」  
「決まってるんだろ。本性を出さないためだ。眠いときよく出やすいからな」

そういつて、眠気を覚まそうと必死な女美さん。なるほど。女美さんらしい。

「そついえば善。」

「はい？なんですか？」

「お前、五味の顔がかっこいいっていつてたよな。なんで知ってた…？」

「えっ？そりゃあ、見たからに決まってる」

「男子も気絶するって、お前自分でいつてたよなあ！！」

「えっ？そつですけど…」

てか、声に出してないのになんで女美さん知ってるんだ!?

「…なんでお前が大丈夫で、俺がダメなのかが納得いかねえ…」

「まあまあ。落ち着いてください。僕も理由、知りませんし」

「いいや! 納得できるまで問い詰める!」

「ええ!?!」

早く納得して欲しいんだけど…。そして、早く僕に顔を近づけるのをやめて欲しい。

女美さん、美人だから心臓が大変なことになる…!!

「WWW 幼馴染だから。じゃ、ダメか?」

「幼馴染だから…。ああ、わかった。納得した」

「はやっ!? 納得はやっ!?!」

「いいじゃねえか。主に、お前の顔が赤くなるのを楽しむ為だけにやったからな!」

そういつて、ニシシ と笑う女美さん。

美人だから絵になるけど、他の人がやったらちよつと怖いからやめてください。

「つてか、五味は意思を伝える物があるなら最初から使えよ!?!」

「WWW すまん。完璧忘れてたWWW」

「本音! 本音出てるから! 良太!?!」

そんなこんなで三人の今日の朝は終わった。

「WWW てか、日直は?」

「あつ…忘れてた…」

三ノ葉 + a    w w w (善は意外と毒舌気味だと思つ。しかも無自覚の)    b y

誤字・脱字がある場合は、報告してくれると助かります。

四ノ葉 鈴蘭さまの様子が可笑しいわ…！？ by 鈴蘭親衛隊（前書き）

今回は、三つの話で一話にしようと思っていたものの二つ目です。

三つ目は、いつかやろうと思います。きつと…

あと、今回は「善が主人公なんだぞ！」ということを見せ付けるために、フラグを立ててみました。

「不憫系主人公にフラグはいらないっ！」という方はブラウザバツクをお勧めします。

それでわ

四ノ葉 鈴蘭さまの様子が可笑しいわ…!? b y 鈴蘭親衛隊

「ごめんなさい!！」

今、僕が何をしてるかって? きまってるじゃないか。  
謝っているんだ!

「ほう…それで? 何か言い訳はあるか…?」

「ありません! 本当にすいません! こけた僕がまったくもって悪かったです」

ただいまの時間は、昼休み。

女美さんも、クラスの人が購買いたり食堂いたりしたため、本性全開です!

それはさておき今の僕の状況説明。

僕は、猫被り時の女美さんから、

「私、体力が無くて、あまり走れないの。できれば、自分で来た  
いのですけど…お願いできます?

(俺はか弱い少女なんだから、善、お前が行って来い。…いけるな  
…?)」

そんな裏の言葉が聞こえるようになってきた僕はそろそろダメだと思  
思っ。

入学して一ヶ月もたたないのにな…

現実逃避しながら購買に向かおうとしていた僕に、女美さんの声がかかる

「間違っても、全部なんて買ってこないでくださいね〜（全種類買って来いよ!）」

ああ〜…裏の言葉なんて聞きたくなかった。

ってか…あれ？お金は…あとで女美さんに聞けばいいや。

そんな僕に、何も知らない人達の嫉妬の視線が突き刺さる。きつと女美さんと話せていいなと思っっているんだろ。

みんな〜！騙されてるよ〜！女美さんの本性は真逆なんだ〜！！

そう、心の中で叫んでも届かないのはわかっている…けど、叫ばずにはられないだろう！

いつの間にか、現実逃避をしながら、僕は購買へ急いだ。

で、買ってきました。

最後の一個の焼きそばパンを巡って先輩と戦ったのは余計なので言いません。

だが！その途中…こけました…。

別に、僕がトロイとか運動神経無いか、そういうのじゃないからね！！

運動神経は人並みにあると思うし…

またまた話がそれちゃったけど、折角買ってきたのにこけて全部ぶちまけてダメになりました…

袋に入ってるだろ？って思う人はまだ甘い！  
袋に入っても、踏まれたら意味無いじゃないか…

で、ただいま女美さんに怒られているわけです。

今は周りに人がいないので、裏の声は無しです。

…よかった…。あれ、妙に鳥肌たつて嫌だったんだよね。

またまた現実逃避をしていると、女子軍団が入ってきた。

そして、女美さんは鋭い目つきをすると、猫被り状態になった。

ここで、問題！

Q何故、女美さんの目つきが鋭くなったのでしょうか？

A女子軍団が、女美さんを虐めている？人達だからです！

正解！って、自問自答やつてる場合じゃないっ！

早く逃げないと巻き込まれる…！だが、一足遅く…

「あら、こんにちわ猫さん」

「こんにちわ。鈴蘭さん」

ニッコリ微笑む女美さんと鈴蘭さん。ってか、女美さんを猫って！  
たしかに、ちよつと猫っぽいけどさ…。

…はっ！冷静に状況を見ていたら逃げ遅れた！ああ…どうしよう…  
実は、裏の声って女美さん限定じゃないんだよね…

「もう、お食事はすませましたの？（食べなくても生きれるから食

事なんて必要ないでしょう?」

「いえ。これからです(安心して食事も出来ねえから失せる!)」

「そうですか。じゃあ、ご一緒させてもらってもいいですか?

(どんな粗末なものを食べているか、私が見て差し上げますわ)」

「はい。喜んで(うげえ...)」

…黒い…僕、ここにいたくないんだけど…女美さんが僕の手首を離してくれないよ…(泣)

僕、こんな ドロツドロ した空間にいたく無いんだけど…

「あら?そちらの方は?(あなたが下僕を持つなんて…白々しい!)」

「前田 善さんといって、私にとつても親切にしてください」

(お前の方より俺の方が人望が上なのは明らかなんだからいいか

げん付きまとうな!)」

「そうですか。(こんなあなたにも人望なんてものがあつたのね)」

相手に裏の声は聞こえないはずなのに、裏だけでも会話しているように聞こえる…

なんとも女性性は恐ろしい…!!

「こんにちわ。隣のクラスだから知っているとありますが、鈴蘭<sup>すずらん</sup>有華<sup>ゆか</sup>といいま す。よろしく願いますね?(はっ!庶民が)」

この人、今鼻で笑ったよ!しかも、裏の声が「庶民が」の一言つて…(涙目)

僕は、涙目になりながら自己紹介をした。

涙目なのはしかないじゃん!怖いんだもん!!女性怖い!恐怖症になりそう…。

「え、えつと…前田 善です…。よろしく」ペコリッ  
お辞儀  
ポンッ！！

…？今さっき変な擬音が聞こえたんだけど…

鈴蘭さんは耳まで顔を真っ赤ににして後ろを向いてるし、女美さんは俯いて笑いを堪えてるし…

えっ！？僕の自己紹介、なんか可笑しかった！？

そういつて女美さんに視線で問いかけるが、女美さんの笑いを増幅させるだけだった。

すると、鈴蘭さんがいきなりこっちに振り向いた。…まだちょっと顔が赤いけど…

それに反応した女美さんは、いっぱつで猫被りの顔を作って前を向いた。

すごいな…。僕なんかびっくりして ビクッ とかいう擬音が付きそうな位驚いちゃったよ。

「きよっ、今日は用事を思い出したので失礼しますわ！！」

あれ？裏の声が聞こえない…なんでだろう？

「はい。またいらしてくださいね（もう来んなー！！）」

「そっ、それではまた会いましょうね。善さん」

女美さんの皮肉っぽい言葉にも反応しなかったし…本当にどうしたんだろう？

僕が首をかしげていると、女美さんがもう限界というように吹きだした。

そして、そのまま湧き出る水のように絶え間なく笑っていた。

「どうしたの？女美さん？」

「いや、あいつが面白くて…ふふふっ…」

どうやら、笑いを必死に堪えているようだ。

「あいつ」というのは鈴蘭さんのことだと思っし…なにが可笑しいんだろう？

「しかも…あからさまに善さんって…」

「？僕の名前を呼ぶことが、そんなに可笑しいの？」

「可笑しいってお前…普通わか…お前…わからないのか？」

急に鋭い目つきになる女美さんにびっくりしながらも、僕は普通に答えた。

「わからない」

普通そうでしょう。相手の気持ちをわかったらそれは悟りを開けるよ。

…まあ、あのあからさまな悪意は除いて。

「…今だけ同情するよ…。こいつは分が悪すぎる…」  
「？」

僕は、よくわからないため、そのまま女美さんの言葉をスルーした。

「ってか、昼飯は…？」

「あっ………」

最近、僕は物忘れがひどくなってきたかもしれせん。

四ノ葉 鈴蘭さまの様子が可面白いわ…!？ by 鈴蘭親衛隊（後書き）

善がなぜ悪意を理解できるのか。それは登場人物に載せるので気になる人は見てください。

ちなみに、善が「！」を多用しているのは、自分のテンションがおかしくなっているからです。

あと、女子軍団は廊下待機なので会話には関わっていません。

誤字・脱字があったら、報告してくださいさるとうれしいです。

五ノ葉 魔窟って知ってか？職員室のことなんだけだよ

b y 噂好きの男

今回はちよつと短めかも知れませんが。

ご了承ください。

それでわ

五ノ葉 魔窟って知ってたか？職員室のことなんだけだよ

b y 噂好きの男

昼休み

ピン・ポン・パン・ポン

『あゝあゝあゝマイクテストマイクテスト……よしっ』

突如、放送のアナウンスがなった。

『あゝ、えっと……一年二組の五味 良太、女美 優子、前田、善は、職員室に来ること。以上』

ピン・ポン・パン・ポン

そういつて、終わった放送。

つてか、なんの呼び出し？僕、特に何もしてないと思うけど……

「善さん。行きましょう？（早くいくぞ！）」

「あつ、うん。ちよつと待って！」

「大丈夫です。待ってますよ（早くしないと置いてくぞ！）」

そういつて、表は優しげ（クラスメイトがいるため、猫被り中）だが、裏では圧力をかけてくる女美さん。……少々怖いです……

「良太！早くいくよ？」

そういつて、 スクツ と立つ良太。 だけど……

「早くいきましょー？」

「待って！まだ良太寝てる…」

「え！？寝てらしたの！？（寝てたのか！？）」

裏と同じ意味なら思わなくてもいいと思うんだけど…  
とりあえず、僕がやるのは…

「良太！おき〜て〜！！」 ユツサ ユツサ

「www（俺は…おきて…い…zzz zzz）」

「りよ〜う〜た〜！！」

「起きました？（起きたか？）」

「ううん…起きない…」

う〜ん…。と悩む女美さん。というか、僕としては女美さんの裏と表の二十音声をやめて欲しい…  
すると、何かを閃いたのか僕に近づいてくる。

小声「なあ、こーいうのはどうだ？」

小声「どうだ。って言われても、まだ案を聞いてないし…」

小声「うるせえ！こーいうのは、最初はこー入るのが筋ってもんなだよ！」

小声で怒鳴ると言う器用なことをした女美さん。  
筋っていわれてもな…

というより、早く離れて欲しい…。周りからの嫉妬の視線が痛すぎる…

小声「五味って、仮面で見えないだろ？」

小声「うん。見えないね。…お面だけど…」

小声「何か言ったか？」

小声「ううん。なんでもない。それより、続けて？」

僕がそういい、女美さんが説明を再開した。

小声「五味を眠らしたまま俺らが引つ張ればいいんじゃないか？」

小声「あつ！確かにそうだね。良太ならお面で顔が見えないし…」

小声「ということ、考える前に実行だ！」

そういつて、実行するために僕の傍を離れる女美さん。

だけど…嫉妬の視線が女美さんがいなくなつてさらに増えました。

…誰か代わつて…

「五味さん？起きてます？」

「へっ？起きてな…いぐう！？」

小声「もう始まつてんだぞ！」

小声「すっ、すいません…」

僕が状況が分からず普通に答えようとして…女美さんに足を踏まれました…

痛い…まだ ジンジン する…。なんか、抉つてるみたい

小声「はい！善セリフ！」

小声「ふえ！？えっ、う、うん。えっと…」

「あつ、良太？起きた…」

小声「下手だぞ！善！」

小声「うう…。僕、こういうの苦手なんです…！」

僕は、お芝居とか演技とか、そういうの苦手なんだつて…！！

そういうのはお母さんとお兄ちゃんにまかせればいいんだよっ…！！

小声「俺がいうから、お前は最小限の言葉で俺に合わせる！」

小声「りよっ、了解…」

「あっ、五味さん起きました？」

「おっ、起きたみたい…」

「www（zzz…鈍感、毒舌、俊足…前田家の次男だ…zzz）」

小声「ナイス！五味！でも、なんて言ってるんだ？」

小声「鈍感、毒舌、俊足…前田家の次男だ…って僕のこと!？」

まさかの僕のこと!？

ひとつも同意できることが無いんだけど…

小声「…納得…」

小声「なにか言った？」

小声「いや、何も」

何言っただらう？何か言った気がするんだけど…

「五味さん？行きましょう」

「良太！行くよ？」

そういつて、僕らは良太の両腕を片方ずつ引つ張る。

そんな茶番があり、やっとなつた…

#### 職員室<sup>魔窟</sup>

そう呼ばれている。その所以は、

この学校の先生が個性的過ぎるためだ。

ある者は頭に角？が生え、またある者は頭が玉葱？。またある者はやる気がない。など、問題がある先生ばかりなのだ。

しかし、そんな先生達は、教頭に忠誠みたいな者を誓っているらしく、こちらが正しければ見方になってくれるが、ほとんどは教頭先生の見方だ（まあ、何かやらかす僕ら生徒の方が一般的に悪いけど）

そんなこんなで、ここは職員室魔窟と呼ばれている。

そして、僕ら三人…一人はお面を被った睡眠中の男子。一人は猫被り中の美女。一人はそれらの暴走を抑えるストップパー。

そんな凸凹な三人が職員室に入ろうとしていた…

「あつ、別に何かあるわけじゃないですよ？」

「誰に言ってるんだ？」

五ノ葉 魔窟って知ってか？職員室のことなんだけとよ

b y 噂好きの男

誤字・脱字があったら報告願います。

六ノ葉 ……俺さ…職務放棄していい…？ by一年二組主任（前書き）

前回の続きです。

最後辺りはシリアスが入っています。

「暗いのきらいー！」って方はクイックターンで戻ってください。

それでわ

六ノ葉 ……俺さ…職務放棄していい…？ by 一年二組主任

ガラガラッ

僕は、職員室の扉を開けた。そこは…  
普通だった

「案外普通だね」

「普通じゃないと困りますから…（魔窟とか言われてるのにな）」  
「www（zzz…zzz…）」

女美さん…。表と裏でいつてること真逆だから…  
つてか、まだ寝てたの!? 良太!

「とりあえず行きましょうか。そのあら…「荒等木先生」そう、荒  
等木先生の所へ」

女美さん…。いくら興味がなかったって、担任の先生の名前くらい  
覚えとこうよ…  
僕もちよっとろ覚えたけど…

そう思いながら歩いていると…

「おい。こつちだ」

美声が聞こえた。

いや、ちゃんとした美声なのか分からないけど、お兄ちゃんと同じ  
系統だと思う。

「何やってたんだ？遅いぞ。」

ここで紹介。

この美声？の人は荒等木先生。通称、角の人だ。

頭から竜のような角が耳の上から生えている謎の先生。だけど、めんどくさがりや。

けど、やるときはやる先生らしく、仕事は優秀らしい。仕事はめんどくさくて、態度はダメダメなため、問題顧問らしい。

けど、顔はイケメンでモテるらしい。…まさしくお兄ちゃんタイプだ…

そんな中、話は続く。

「すみません。ちょっと混んでたもので…」

「ふん。そうか。…まっ、いつか。というか、話す前にそのお面、起こしとけよ」

気づいていたが、途中で言うのを止めた様な違和感。そんな違和感を僕は感じた。

っていうか、良太が寝てるの気づいてたの！？…すごい…

小声「良太！おきてよー！！」

「www（zzz…あと五分…と1228分…zzz）」

小声「もう次の日だから！！」

長いよ！！どれだけ眠いんだよ！！…もうツッコミ疲れた…僕は、先生に向かって首を振った。

「…まあいいだろう。お前からお面に話しとけよ。」  
「了解しました…」

そういつて先生は話し始める。…一瞬、僕に同情の視線が向いた気がするけど…気のせいかな？

「え〜っと、お前ら、部活に入っていないだろ。」

「はい。」

「入ってないです。」

肯定する僕ら。ちなみに、良太は省きました。

「単刀直入に言う。お前ら部活入れ。」

「嫌です」

「えっと、ちよっと…無理です…」

そう僕らが言うのと、予想していました。けど、一応言ったけどダメでした。みたいな感じにため息をはいた。

「…分かってたけどさ…。で、理由は？これ聞かないと帰れないんだよ。」

「私は、家が道場なのでそれで手一杯ですし、やりたくないし。」

女美さん！本音！本音！本音漏れてるってば！

「で、その苦労性の少年は？」

「あつ、僕は親が共働きで兄と妹もほとんど家にいないので家の用事…えっと、家事とかやらなければいけないので…」

「お前…苦労してんだな…」

「…すげえ…けど、俺はあの立場にはなりたくない…」

僕の理由を言ったとたん、二人が僕を同情の視線で見えてきた。つてか、女美さん！なりたくないってどういうことですか！家事だつて意外と楽しいんですよ。

「お面は…いいか。じゃあ、帰ってよし。あつ、女美は残れ。話がある。」

「何故ですか？（いいから早く返せ！）」

女美さんの裏の声が聞こえてくる…。たびたび本音もれてたから、裏の声聞こえなかったのかな？  
まあ、いいかな。

「じゃあ、女美さん。先帰ってるね」

「はい。（別に報告しなくてもいいんじゃない？）」  
たしかに報告しなくてもよかった気がするけど、いわなきや怒られそうだったから…  
そうして、僕は職員室を後にした。

「www（はっ！ここは…どこだ…？知らない天井だ…）」  
「そこ床だから。つてか、今起きたんだ…」

美女視点

俺は、荒…なんとか先生につれられて、不思議な部屋に入った。

「なんですか？この部屋は」  
「そう警戒するな。大丈夫。ここには何も無い。」

「そういわれても、信じられるわけがねえだろ！」

「まあ、別に何かをするわけじゃねえから、安心しろ」  
「で、ご用件は何ですか？」

「こっちは早く授業を終わらせたいんだ。早くしろ。」

「お前には、忠告をしに来た」

「…忠告…ですか？」

「ああ。これでも、俺の本業は占い師だからな。」

「占いか、信じないんだけどな…」

「俺の占いは、大きな変化を読み取れる予知能力だ。」

「それがどうかしたのか…？」

「普通は相手に特定して見るんだが…特定しなくても視れる大きな予知があった。」

「それが…私に関係してくると…？」

「ああ。そうだ。」

「そういつて、先生は後ろを向いた。」

「卒業するまでの三年間…それが、お前にとっての通過点だ」  
ターニングポイント

「ターニングポイント…？」

「そうだ。それを逃すと…お前の心は闇の中だ」

「ッ…!!…!!」

闇の中…三年間…俺には意味が分かる。わかりたくないほど…わかる…

「その三年間、よく目を凝らして「視る」んだな。」

そういつて、先生は最初に入った扉から出て行った。

タイミングポイント  
「通過点」

その眩きは、闇の中に消えていった…

六ノ葉 ……俺さ…職務放棄していい…？ by一年二組主任（後書き）

新キャラ登場です。

蒼が提案したキャラで、一回は没にしたんですけど、性格を変えて出しました。

ちなみに、占い師とかぜんぜん設定にありませんでした。

詳細は、後日登場人物で…

誤字・脱字など、報告してくれると助かります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1439ba/>

---

美女に勝てない善人

2012年1月12日23時56分発行